

# We were here

The Edge of Infinity

Written by Benjamin Joseph Sandahl

## あらすじ

全ては二十世紀を謳歌しすぎた人間へのしっぺ返しに思われた。エボラ、マールブルグ、ラッサ熱……。幾度目かのコロナの変異が引き金になったかのように、未知のウイルスが恐るべき勢いで地球上の人命を奪っていった。

化石燃料の消費は、本来生命を育む雨を酸性雨へと変えた。それは森林を枯らし、湖や沼から魚を死滅させた。

大気中の炭酸ガスやメタンの増加は地球の温度を激変させた。異常気象による作物の不作、砂漠化に伴う耕地面積の減少は世界的な食料不足を招き、各地で起こった食料と水を奪い合う小競り合いや暴動は、やがて大同土を絶望的な核戦争へと導いた。

フロンガスにより破壊されたオゾン層は大量の紫外線と放射線を地表に侵入させ、生物の遺伝子に突然変異をもたらした。

ネズミは巨大化し、人類は絶滅に瀕していた――。

生き残った一部の大物政治家や金持ちは、備蓄した食料を略奪者から護るために、かつての政府管轄の都市(シティ)を武装化して外部の人間を遮断した。

外部の人間、即ち瓦礫の荒野に暮らす僅かに生き残った人間たちは、ネズミから身を護るために城壁のように瓦礫で周囲を囲った村に身を寄せ合い、草や虫、ネズミの肉を食べ生きていた。24人が暮らす村の一員である片桐 隆次(34)は元医者で、ドクと呼ばれ、臨月間近の話すことのできないレイ(22)と暮らしていた。

ある日、食べ物を探取しに出た成瀬 順二(46)と篠田 譲(23)が、ろくに樹も生えていなかった場所に森を見たという。村人たちは「あり得ない」と反発するが、「食べ物となるものがあるかもしれない」とドクたち6名はその確認・探索に出ることになる。

驚いたことに森は存在した。途方もない密林がそこにあったのだ。

密林に食料探索に入ったドクたち6名を、意思を持ったかのような鳶が襲う。

同じ頃、山瀬 玲子(38)たち8人も別の食糧探索に出ていたが、それまで昼間から集団で襲うことのなかったネズミが大群で玲子たちを襲ってきたのだ。

村でも異変があった。レイプしようとした小田嶋 良和(34)が和田倉 薫(16)に銃で撃たれたのだ。

たった一日で村の大半の人間を失ったことに生きる望みを持たなくなった村人たち。8人が生き残ったが、ドクとレイを除く6人が次々と首を吊り、自ら銃で命を絶っていく。

そして数日。生き残ったドクはレイのこどもを取り上げる。だが赤子は産声を上げず、レイは分娩時のショックで息絶えてしまう。

「人間の声が聞きたい……」

フラフラと夢遊病者のように村から出て行くドク。

瓦礫の荒野を彷徨うドクの目にシティの高層ビル群が映る。

## 人物

- 片桐 隆次 (34) 通称ドク 元医者
- レイ (22) 喋ることができない ドクの子供を宿している
- 三澤 正 (42) 元警察官 村の実務部隊のリーダー的存在
- 山瀬 玲子 (38) 村の女性たちのリーダー的存在 三澤と暮らす
- 小林 和夫 (26) 村の若者のリーダー格
- 小田嶋 良和 (34) 奈緒子と暮らしているが密かに薫を狙っている
- 竹田 奈緒子 (32) 小田嶋と暮らす
- 厚木 恵美 (45) 変な関西弁を使う
- 村井 清子 (72) 自称神の使者
- 田林 三郎 (68) 村の長 血縁はないが薫を孫のように思っている
- 和田 倉薫 (16) 田林と暮らす
- 宮川 武志 (29) 手先が器用で罫などを製作するときの中心的人物
- 飯島 真七 (27)
- 浅見 景子 (37) 元スナックのママ
- 住吉 隆 (43) 景子に気がある
- 影山 静夫 (41) 景子に気がある 住吉のライバル
- 遠山 久 (48) 村の実務部隊のNo.2
- 長谷川 美香 (50) 遠山と暮らす
- 神山 治朗 (46) 緑の実父
- 神山 緑 (18) 神山の実娘 生きる気力を半ばなくしている
- 成瀬 順二 (46)
- 篠田 譲 (23)
- 藤代 達也 (26)
- 木田 悠斗 (25)
- 受付嬢 『選ばれ民の都市』管理センタービル受付嬢
- 男A～D 『選ばれ民の都市』住民
- 女A～C 『選ばれ民の都市』住民
- 先生
- 生徒①～④

○灼熱の太陽

○シテイ（旧政府管理市街地）・ビルの屋上

吹き荒ぶ風音――。  
一面を覆い尽くした太陽光発電パネルが強い陽光を反射している。以後、指示あるまでビルからの遠景は見せずに。隣接するどのビルの屋上も太陽光発電パネルで覆われている。パネルのいくつかは割れ、いくつかは捲れ上がり強風に震え、長期間放置されてきたことを窺うかがわせる。

○同・高層ビル群

クレジット・タイトル始まる。外壁が崩れ傾いている高層ビル。窓は割れ、外壁の一部が崩れ躯体が露出した高層ビル。廃墟と化した、かつてこの街の中心を担っていた高層ビル群を。幾つかの高層ビルの下層階（5階程度）に監視カメラと連動する物々しい銃座が据え付けられている。

○同・街並み

クレジット・タイトル続いて――。  
一階部分が潰れ傾いたマンション。屋根が崩れ、看板が折れ強風に軋きむガソリンスタンド。

○同・メインストリート

クレジット・タイトル続いて――。  
放置された朽ちた自動車。錆びたドアに残る擦られた日本国政府紋章（五七桐紋）。  
折れた歩道橋。  
倒れ傾いた高架の高速道路。  
崩れたビルの瓦礫の山の一部が小さく崩れ、隙間から顔を覗かせるネズミ。  
ネズミ、道路に飛び出し壊れて拉げた自衛隊車両の残骸の陰に隠れる。車両との対比からネズミが小型の犬ほどもあると判別できるように。

○同・高層ビルに設置された銃座

甲高いモーター音と連動し素早く銃身を眼下に向ける。

○監視カメラの映像

素早く照準を眼下の自衛隊車両の陰のネズミに重ねる。  
画面に点滅する『Invader』の表示。  
間髪を入れずに轟く数発の重い銃撃音に画面が激しく揺れる。

○シティ・高層ビルに設置された銃座。

クレジット・タイトル続いて――。  
空砲を撃ち続けている銃口から出る硝煙が強風に飛ばされていく。

○同・メインストーリー

原形を留めないネズミの死骸。飛び散った肉片が痙攣<sup>けいれん</sup>している。クレジット・タイトル終わる。

タイトルとサブタイトル

『We were here』

The Edge Of Infinity』

ひび割れ、所々捲<sup>めく</sup>れ上がったアスファルトの上を土埃が吹き抜けていく。と、ポロポロになったレジ袋が上空に舞い上がる  
画面、舞い上がったレジ袋を追う。

○同・上空

高層ビルより高く舞い上がったレジ袋。カメラの焦点が徐々に開放され、次第に鮮明になっていくシティからの遠景。そこには所々にビルの残骸が残る荒涼とした瓦礫の荒野が広がっている。遠方に土埃に霞む小高い丘（岩山）を配して。

○瓦礫の荒野・小高い岩山

荒涼とした瓦礫の荒野に隆起した、脆い岩盤が剥き出しになった小高い岩山。その麓部分が洞窟の入口のような抉<sup>えぐ</sup>れた窪地になっている。

○同・同・窪地

強風を避けている5人の男たち。皆、薄汚れた出で立ちにリュックサックを背負い、マフラーのようにボロ布で口鼻を覆っている。

岩壁にもたれるように座している片桐隆次<sup>34</sup>・通称ドク<sup>26</sup>、三澤正<sup>42</sup>、小林和夫<sup>26</sup>、小田嶋良和<sup>34</sup>、藤代達也<sup>26</sup>。それぞれ手には（或いは傍らに置いた）こん棒やボロボロになった木製バットを持っている。

小田嶋「ひでえ風だ。土埃で尻<sup>けつ</sup>の穴ン中までジャリジャリだぜ」

ドク、外を見る。  
彼方に土埃に霞むシテイの高層ビル群を。

ドク「少しは治まってきたようだが……」  
口鼻を覆っていたボロ布を外し、ペツと唾を吐き、古く汚れたペツトボトルに入れた水を飲む。

三澤「予定を変更しよう。日没までの時間を考えるところ以上遠くへは行けん」

小林「こんな天候で、どうやって食い物を探せつてんだ。探すよか動かねえ方が腹が減らずにすむぜ」

三澤「嘆くな。備蓄食料も少ない。食いたきや働け」  
小林「ケツ！」

○同・村・城壁（外周）

周囲を瓦礫や壊れた家具、廃材で城壁の  
ように囲った一画。中央に窓の破れた低層階（4階建て）  
のビルが建っているのがわかる。

○同・同・畑

僅かばかりの敷地の畑。  
強風になびく枯れた苗。  
風が乾いた畑土を吹き飛ばしていく。

○同・小高い岩山・窪地

体を休めているドク、三澤、小林、小  
田嶋、藤代。

ドク「三澤さん、以前、給食室の跡地から大  
鍋を見つけた小学校に寄りませんか。村に  
戻る道を少し迂回すれば……」

三澤「小学校の跡地？」

ドク「川沿いの銀行の奥にある」

三澤「三澤、小田嶋を見る。」

小田嶋「いや、わからん……」

三澤「三澤、小林と藤原に顔を向ける。」

小林「小学校なんてあったか?!」

藤代「市役所の間違いじゃないですか？」

拾った小石で岩壁いわかべに山のような絵の隣  
に人間の絵を描き、

ドク「ここが俺たちが今いるところだ」

絵の下に『*We are here*』と記す。

山の上方に○を描き、

ドク「ここが村だ」

山と村の間に二本線で川を描くドク。



○同・村・畑

枯れた苗を手に項うなだ垂れて立つ山瀬玲子

(38)と厚木恵美(45)。

恵美「(玲子を窺う)……」

玲子「……」

突然、大きな地鳴りと共に大地が激しく揺れる。

尻もちをつく恵美。

思わずしゃがみ込む玲子。

やがて揺れが収まる。

恵美「(不安そうに)最近、多いんとちゃう？」

玲子「……」

○同・小高い岩山・窪地

岩壁に描いた地図を説明しているドク。

ドク「川沿いの銀行の跡地を——」

地図を説明していたドクの手が止まる。

地鳴りと共に激しく揺れる大地。

身構えるドク、三澤、小林、小田嶋、

藤代。

頭上からパラパラと落ちてくる拳ほど

の小石。

ドク「逃げろ！ 崩れるぞ」

○同・同

強風が吹いている。

激しく揺れている大地。

岩山が崩れ、大きな岩が頭上から落ち

てくる中、岩山の窪地から這い出てく

るドク、三澤、小林、小田嶋、藤代。

窪地の上部の岩山が崩れ落ちる。  
地震が収まる。  
這う這うの体で窪地から這い出てきた  
ドク、三澤、小林、小田嶋が荒い息で  
倒れ込んでいる。  
上体を起こす三澤。頭から血を流して  
いる。

三澤「（怒鳴るように）皆、無事かあ？」

ドク「三澤さん、頭から血が……」

三澤「小石がかすっただけだ、心配ない」

小林の声「（叫ぶ）藤代ー！」

その声に振り向くドクと三澤。  
崩れた岩山の際に俯せに倒れている藤  
代。その脇に跪く小林。  
駆け寄るドク、三澤。少し遅れて小田  
嶋。  
俯せに倒れている藤代の両膝の上に大  
きな岩が被さっている。

小林「おい、藤代！」

目を開ける呆然とした表情の藤代。

小林「今、助けてやるから」

ドク、藤代の脈を採りながら、

ドク「どこが痛い？」

藤代「……」

小林「（怒鳴る）藤代！」

藤代「あ、ああ……」

小林「どこが痛えんだか教えてろ！」

藤代「あ、脚の……、か、感覚が……」

三澤「（ドクに顔を向け）ドク……」

ドク「全員、水筒を出すんだ」

小林「（怒鳴る）そんなことより岩をどかす方が先だろ」

リュックサクサクからペットボトルを取り出しながら、  
ドク「壊死した筋肉から出る毒素の血中濃度を下げてやらなければ、岩をどかした途端、一気に流れる血流に乗って毒素が全身に運ばれる」

小林「……」  
ドク「それは臓器に致命的な損傷を与える」  
自分のリュックサクサクから使い古されたペットボトルを取り出す小林。

ドク「この岩を動かすのは難しい。藤代の脚の下の土を掘って引きだそう。小田嶋さん、土を掘るようなものを探してくれ」

小田嶋「土を掘るものな。了解」

ドク「三澤さんは藤代の太腿を縛れるような少し幅のある紐を二本作ってください」

三澤「あ、ああ、わかった」

小林「ドク、俺は？」

ドク「藤代に水を飲ませろ」

×

×

×

風はかなり治まっている。

藤代の脈を採っているドク。

木片で藤代の膝の下を掘っている小林と小田嶋。

こん棒を持ち周囲（のネズミ）を警戒している三澤。頭に巻いたボロ布に血が滲んでいる。

ドク「三澤さん、ネズミは？」

三澤「今のところ姿は見えん」  
小田嶋「ダメだ。表面の土のすぐ下は岩盤だ」  
小林「クソ！」  
と、手にしていた木片を叩きつける  
三澤「ドク……」  
ドク、太陽を見る。  
ドク「仕方ない、岩を動かそう」  
× × ×  
岩の下に突き入れた古びた角材の下に  
小岩を置き、岩とは反対側の角材の端  
に立つドク、小田嶋、小林。  
藤代の脚の両付け根をボロ布でできた  
紐で強く縛る三澤。  
三澤「よし、縛り終えたぞ」  
掛け声と共に角材の端を力一杯押し下  
げるドク、小田嶋、小林。  
藤代の上体を抱いて引っ張る三澤。  
苦痛の呻き声を漏らす藤代。  
三澤「（藤代へ）もう少しの辛抱だ」  
バキッと角材が折れ、勢い余り倒れ込  
むドク、小田嶋、小林。  
小林「ちきしょう！」  
三澤「長いバールでもあればどうにかなりそ  
うだが……」  
小林「夢みてえなこと言っただんじゃねえよ」  
三澤「……」  
小林「戦争じゃあマンションやビルの鉄筋ま  
で供出させられたんだぞ」  
三澤「……」  
立ち上がり、

小林「戦争が終われば略奪だ。盗人どもは万札の束には目もくれず一円玉を奪ってった」

藤代の脇に立つ小林。  
小林「奪う金属がなくなりや奴ら徒党を組んで残ったビルから鉄骨や鉄筋を引っこ抜いていきやがった」

周囲の瓦礫の荒野を見回し、  
小林「挙句の果てがこの様じゃねえか。バルなんてどこにあるってんだよ」

ドク、藤代の傍らに跪き、昏睡している藤代の瞼を開け様子を診る。

ドク「村に帰って救助を呼ぼう」

三澤「戻って来る頃は日没近くになるぞ」

ドク「わかっていきます」

ドク、三澤の目を見据える。

三澤「(ドクの目を見て) ……」

三澤、ドクから視線を外す。

三澤「わかった。そうしよう」

ドク「村へは俺が行くが単独行動は避けたい。

三澤さん、一緒に行ってもらえますか？」

三澤「あ、ああ、一緒に行こう」

ドク「(小林と小田嶋に) 藤代を頼む」

小田嶋「(空を見上げ) あまり時間はないぞ」

ドク「時間はかからない」

それぞれのリュックサックを持ち連れだって歩き去っていくドクと三澤。

バットを持ち藤代の横に立って(ネズミを)警戒する小田嶋。

小林、藤代の傍らに腰を落とす。

昏睡状態の藤代を。

小林「安心しろって。じきに村の奴らが来る。そしたら直ぐに助けてやっから」

両手を頭の後で組み仰向けになる小林。

小林「何があるうが俺が面倒みてやっからよ」

小田嶋「おい」

小林、小田嶋を見る。

小田嶋、顎で前方を指す。

小林、上体を起こす。

50メートルほど先で向き合い何か話しているドクと三澤を。

小林「（小田嶋を見る）……」

小田嶋、首を傾げる。

小林「（藤代に）すぐ戻るからな」

と、立ち上がり前方に駆け出す。

○ 同

小走りに来た小林が驚いたように立ち止まる。

沈鬱な表情で向き合うドクと三澤。

ドクの手には拳銃リボルバーが握られている。

小林、ドクの胸ぐらに組み付く。

小林「待てよ、何なんだよ、その拳銃はよ。」

村に救助たすけを呼びに行くんじゃねえのかよ」

ドク「……」

小林「あんた医者だろ。人の命を助けるのが

役目なんじゃねえのかよ」

ドク「……」

三澤「救助たすけが来たとしても、あの岩をどかさ

のにどれくらいかかると思う」

小林「何時間かかろうと助けてやるさ」

三澤 「夜になればネズミが襲ってくる」

小林 「俺が守ってやるよ」

三澤 「どうやって？」

小林 「焚火を焚いて——」

三澤 「風が吹けば焚火なんて焚いちゃいられ

ん」

小林 「……」

三澤 「火が消えれば救助たすけに来た者までネズミに襲われる……」

小林、ドクに組み付いていた腕を離す。

拳銃の弾倉を点検するドク。

ドクの手にする拳銃を掴み、

三澤 「俺がやろう。俺は元警官だ。銃の扱いなら君より慣れてる」

三澤、ドクから拳銃を取り上げ弾倉を点検する。

三澤 「もつとも人を撃つたことはないがな」

小林 「頼みがある」

三澤 「生きたままネズミに襲わせたいか？」

小林 「やめろってんじやねえよ。自分が死んだこともわからねえように、な……」

○ 同・小高い岩山

岩の下で俯せに倒れている昏睡状態の藤代。

その横にバットを持って立つ小田嶋。

前方から歩き来たドク、三澤、小林が

藤代の周囲に立つ。三澤の手にした拳銃に気付き表情が強

張る小田嶋、

——顔を背ける。

藤代の周囲に立つドク、三澤、小林、少し離れて立つ小田嶋を逆光のシルエツトで。

小林「（明るく）藤代、しかしおめえは運の良  
い野郎だぜ。安心しろって言ったろ」

銃声が轟く。

続けて二発目の銃声が轟く。

しばしの間。

小林「（悲しげに）本当に運の良い野郎だぜ。

こんなところでこれ以上生きなくてすむんだからな……」

○同（闇夜）

漆黒の間——。

瓦礫の上を徘徊するネズミたちの眼光が鈍く光る。

彼方に微かな明り。

それは彼方の村の焚火の明りである。

○同・村・ビル前の広場（夜）

窓の割れた四階建ての小さなビル。その前の広場に焚かれた大きな焚火。周囲に数棟の掘立て小屋が建っている。焚火の脇に設えられた石積みの粗末な竈かまどに大鍋がかけられ湯気かまどを上げています。焚火の周囲で思い思いに座り込み食事をしている二十人ほどの男女。

×

×

×



焚火から少し離れたところで食事（粗末な皿一枚）をしている三澤と玲子。三澤、手にした中身の残る皿を地面に置き、汚れたペットボトルから水を飲む。

三澤の皿を取り三澤に差し出す玲子。

三澤「（首を横に振り）……」

玲子「……」

玲子、三澤の皿を地面に置く。

× × ×

ビルの壁に立てかけた木彫りの像の鬼のような形相が焚火の明りに浮かぶ。その脇で、一心不乱に新たな木彫りの像を彫っている宮川武志（29）。

立て掛けてあった木像が歩き来た木田悠斗（25）の脚にあたり倒れる。

木田「おっとお、悪いい」

宮川、木田を睨む。

木田「そんな怖い目で睨むなよ。たかが人形倒したぐれえで」

宮川「人形じゃない、神様だ！」

木田「神様！？ この不つ細工な人形がか？」

と、倒れた木像を足蹴にする。

木像を拾い上げ、立ち上がって木田と対峙する宮川。

宮川「罰ばちがあたるぞ」

木田「あたるとどうなる？」

宮川「地獄に落ちる」

木田「へえ、そいつはよろしくねえな。ところでその神様は何てえ名前の神様だ？」

宮川「神様は、神様だ」

木田「今、おまえが彫ってる神様の名は？」

宮川「……」

木田「何てえ名前の神様なんだよ」

宮川「神様……二……二……」

木田「神様二号?! ハハハハ、神様二号だと

よ」

村井清子の声「(怒声) 黙らんかい！」

× × ×

音をたて皿の食事をすする村井清子

(72)。振り乱れた髪に齒のない口は魔

女を思わせる。

清子「(独言) ったく、どんなしっけなされてきたん

だか。飯のときくらい静かに食えんのかい

な」

木田の声「(笑いながら) 神様の名前が神様二

号だとよ。地獄に落ちるんだと」

清子「(怒鳴る) おまえらに神のことがわかる

かい。安心せえ、どこへも落ちんわい」

木田の声「見ろ、念仏婆あだつてああ言つて

らあ。地獄に落ちねえとよ」

清子「(独言) 落ちようがないわい、ここが地

獄じゃ……」

音をたて食事をすする清子。

× × ×

壊れかけた椅子に座り食事をしている

神山治朗(46)と神山緑(18)親娘。

緑は沈んだ表情で、食事の皿を持った

まま食べようとはしない。

神山、近くで音をたて食事をしている

清子を見て、

それから、食事を摂らない緑を見て、

神山「（緑に）食べ！」

緑「……」

×

×

×

浅見景子（37）のコップにペットボトル

から水を注ぐ住吉隆（43）。

景子「ありがとう」

住吉、嬉しそうに微笑む。

影山静夫（41）がやって来る。

影山「いいかな、ママ？」

景子「あら影山さん、どうぞ」

景子を挟んで住吉の反対側に座る影山。

影山、「はい、ママ」

と、と何かを景子に手渡す。

景子「（驚き）石鹸じゃない」

影山「最後の一個」

景子「いいのかしら？」

影山「喜んでもらえるのなら」

住吉「物でママを釣ろうなんて、影山くん、

実に君らしい幼稚な行為だな」

影山「物で釣る?! もうちよつと上品に言え

ないかな。これはね、プレゼント」

住吉「同じですよ。相手に物を贈り好感を持

ってもらおうとするわけです。自分に自信

のない者がよくする、まっ、幼稚で、ある

意味卑劣な行為ですな」

影山「私が誰に何をプレゼントしようが、あ

なたには関係ないでしょ」

住吉「ママにそういう行為をする事自体が問

題なんです。だいたい君は人を見る眼がない」

影山「はあ?!」

住吉「君はママが物に釣られるような人間だと思っっているからそのような行為に及ぶのであって、それはママを侮辱しているということに気付かないのですか？」

影山「プレゼントは卑劣な行為ですか？」

住吉「当然です」

影山「ママを侮辱しているわけですか？」

住吉「勿論です」

影山「そういえばママ、サイズの全く合わない靴をプレゼントされて困ったことがあったよね」

景子、吹き出す。

影山「あの靴を贈った奴は卑劣で、ママを侮辱して、しかもバカということだな」

住吉「バカとは何だ、バカとは！」

言い争いを始める住吉と影山。  
その言い争いに呆れ、顔を背けた景子の視線の先に竹田奈緒子(32)と食事をしている小田嶋がいる。

景子の視線に気付く小田嶋。

景子、微笑む。

小田嶋、微笑み返す。

奈緒子、景子を睨む。

景子、首をすくめて視線を逸らす。

奈緒子「(小田嶋の腕を取り)ここじゃ落ち着いて食事もできやしない。向うへ行きましょ」

小田嶋、しようがなく立ち上がる。

× × ×  
竈の大鍋の番をしながら食事をしてい  
る飯島真七(27)と恵美。

恵美「なあ、最近、またネズミが大きくなった  
と思わへん？」

真七「前、村で飼っていた鶏も大きくなりす  
ぎて危険だからって、絞めて食べちゃった  
わよね」

恵美「せや、普通の鶏やってんげど、翼は長<sup>なが</sup>う  
なる、嘴<sup>くちばし</sup>は鋭うなって、背丈はうちの乳く  
らい大きくなったんちゃう」

真七「(笑い)それは大袈裟よ。恵美さんのバ  
ストまでは……」

恵美「オゾンホールからの紫外線で人間は皮  
膚がんになってん。ぎょうさん人が死によ  
った。ネズミや鶏には毛や羽があるやろ。  
だからがんにならずに大きくなったんちゃ  
うかな。うちの乳くらいに」

真七「だからあ、それは大袈裟だつて。そう  
ね、恵美さんのお臍<sup>へそ</sup>くらいかしら」

恵美「(小声で)今度、ブラ外したところ見せち  
やる。見事な垂れっぷりに愕<sup>おどろ</sup>くで。乳首は  
ちようど臍のあたりや」

遠山久(48)と長谷川美香(50)が連れ立  
ってやって来る。

遠山「真七ちゃん、まだあるかい？」

真七「あ、はい」

遠山の皿に鍋の中身をよそる真七。

恵美、少し離れたところで言い争って

いる住吉と影山を見ている。

美香「若い人たちより食欲があるんだから、カッコ悪いったらありやしない」

遠山「食欲があるとカッコ悪いのか？」

美香「そりやそうよ、こういうご時世ですか  
らね」

恵美「食欲ならいいんちゃう」

言い争っている住吉と影山。奈緒子に腕を引かれていく小田嶋。それらの光景を見て、

恵美「問題は性欲やで」

× × ×

ビルの陰で膝を抱え佇んでいる和田倉薫(16)に歩み寄り、食事の皿を差し出す田林三郎(68)。

田林「早く食べんとなくなってしまうぞ」

薫「(皿を受け取り)……」

そこへ成瀬順二(46)と篠田譲(23)がやって来る。

成瀬「田林さん、ちょっと」

田林「何か？」

成瀬「今日、篠田と変電所跡まで行ったのですが……」

田林「おお、そうでしたな。ご苦労様でした」

成瀬「近道をしようとしてトンネル山を登ったとき……」

田林「何かありましたか？」

× × ×

竈の脇に歩き来る田林。

田林「皆さん、お疲れさまです」

田林「田林に注目する村の人々。  
田林「皆さんご承知のように、本日、藤代くんが事故で亡くなりました。皆で彼のご冥福を祈ろうじゃありませんか」  
村の人々を。頭を垂れ黙祷する人、合掌する人等々。  
田林「では、次は玲子さんから」  
立ち上がり、  
玲子「畑の苗が全滅です。備蓄した食料もあり余裕がありません」  
田林「明日から食料探索隊を毎日二隊ずつにしようと思えますが……」  
遠山「異議なし。飢えるのはご免だ」  
木田「(挙手をし)ネズミ狩りを復活させるつてのは？」  
三澤「最近のネズミは狩るには大きくなりすぎて危険だ」  
小田嶋「罫はどうだ？」  
遠山「余程頑丈に作らんな」  
田林「宮川さん、どうでしょう？」  
宮川「太い角材を使えば重くなります。生け捕りにするのはなく、殺して捕まえ、他のネズミに喰われないようにすれば……」  
田林「できますか？」  
宮川「やってみます」

○同(闇夜)

漆黒の闇の彼方にライトアップされたシティの高層ビル群が浮かんでいる。

○同・村・ビルの屋上（夜）

柵越しに、彼方の闇に浮かぶライトアップされたシティの高層ビル群を眺めている小林。

ドクの声「美しいな……」

小林、声の方に顔を向ける。

小林の隣に立つドク。

ドク「人間の創造った物は美しい」

小林「……」

ドク「藤代のことだが――」

小林「死んじまった奴のことを一々気にしてたら、今頃生きちゃいねえよ」

ドク「違くない」

しばしの間。

小林「この日本に、いったい何人の人間が生き残っていると思う？」

ドク「……」

小林「（シティを眺め）あそこには何人の人間が生活してんだろうな」

ドク「……」

小林「『神に選ばれし民』だよ。日本を食物にしてきた国会議員や金持ちの連中のことをだぜ」

小林、反転し背中で柵に凭れる。

小林「俺が神なら奴らより念仏婆あを選ぶね」

ドク、口元が緩む。

小林「自分たちだけ生き残ろうなんて、いかにも人間の考えそうなことだよな」

ドク「確かに人間らしいな……」

小林「見ろよ、あの照明。奴らもう10年近く、



毎晩ああやってビルを照らしてきたんだぜ。  
エアコンもあれば冷蔵庫もあるんだろうな」  
玲子の声「ドク」

玲子の声に振り返るドク。  
玲子、食事の皿を持ち立っている。

玲子「レイちゃんの食事」

ドク「(皿を受け取り)すみません」

歩き出すドク。

小林「人間は生き残るよな？」

ドク、立ち止まる。

小林「それがたとえ奴らでも、生き残るよな？」  
ドク「ああ、生き残るさ」

彼方のライトアップされたシティの高層ビル群を。

○同・同・ビルのドクの部屋(夜)

ガラスのない窓から僅かに焚火の明りが射し込んでいる。

粗末なベッドで寝ているレイ(22)。

レイの枕元に立つ皿を持ったドク。

× × ×

窓から射し込む早朝の陽光。

ベット脇の棚に置かれた食べ物の残った皿。

ベッドで寝ているドクに寄り添うよう

に寝ているレイ。

ドクの手がレイの臨月間近の張り出した腹部を抱くように置かれている。

清子の声「(窓外から)神のお告げじゃ。神のお告げじゃ。森が攻めてきよる。森が攻め

お告げじゃ。森が攻めてきよる。森が攻め

てきよる」

その声に目覚めるレイ。  
怯え、ドクに身を寄せる。

○同・同・ビル前の広場（早朝）

髪を振り乱し大仰な仕草で喚き歩く清子。

清子「えらいことじゃ。森が攻めてきよる。森が攻めてきよる」

掘立て小屋から寝呆け眼で出てくる小林。

小林「（怒鳴る）うるせえぞ、念仏婆あ！」

清子「うるせえとは何じゃ、うるせえとは。

神のお告げぞ。この罰当たりが」

小林「静かにしねえと息の根止めんぞ」

清子「おお、止められるものなら止めてみい。

おまえのような獣が神の使者であるこのわしを殺せるとでも思っておるのか」

ビルの窓という窓、全ての掘立て小屋から十数人の眠そうな顔が突き出てい

る。  
清子「わしは神の使者ぞ。不浄に塗れた輩に

は指一本触れることも叶わんわ」

小林「何だとう……」

と、清子に迫ろうとする。

カーン！

ビルの窓、掘立て小屋から突き出ていた顔が一斉に音の方に顔を向ける。

竈で食事の用意をしていた玲子が柄杓で鍋の底を叩く。

カーン！

清子・小林「（嬉しそうに）飯か？！」

ビルの窓、掘立小屋から突き出ていた顔が呆れたように一斉に顔を引込める。

○同・同・ビルのドクの部屋（早朝）

窓外を見ていたドクが顔を引込める。

怯えてドクに抱きついているレイ。

ドク「心配ない」

レイ「（怯えて）……」

ドク、レイの両肩を掴み、自分の体からレイを引き離す。

ドク「（レイに顔を近づけ）心配ないんだ」

レイ「（怯え）……」

ドク「さあ、飯だ。お腹のこどものためにも食べてくれよ」

レイ「（怯え）……」

ドク「わかるか、飯だ、飯……」

と、食事を食べる仕草を見せる。

レイ「（怯えの表情を少し和らげ）……」

ドク「（微笑み）そうだ、わかるな、飯だ」

○同・同・ビル前の広場（朝）

村の人々（レイと薫はいない）の前に

立つ田林、成瀬、篠田。

田林「成瀬さん、篠田くんからもう一度確認

したいということ皆さんには話しません

でしたが……」

成瀬「食料探索に出るんじゃ丁度いいと思い、

確認前だが話すことにした」

影山「何のことだ？」  
成瀬「昨日、篠田とトンネル山に登ったんだが、給水塔の向こうに森が広がっていた」  
小田嶋「給水塔の向こうに？！おい、森どころか樹さへろくに生えちやいないぜ」  
成瀬「近くで確認したわけじゃないし風が強く土埃も酷かったが、給水塔の先、そう、数百メートルほど先に樹々が鬱蒼と生い茂ってたんだ」  
小林「あり得ねえな」  
成瀬「俺もそう思った。だから再度確認してからと思ったんだが……」  
三澤「蜃気楼ってことは？」  
成瀬「あんな大きな蜃気楼があるとは思えない」  
遠山「大きいって、どのくらいの森なんだ？」  
成瀬「見当もつかないくらい……」  
と、篠田を見る。  
篠田「俺にもそう見えませんでした」  
清子「森が攻めてきたんじゃない」  
小林「黙れ」  
清子「（語気を強め）神のお告げじゃあ」  
小林「（怒鳴る）黙れ、クソ念仏婆あ！」  
三澤「（語気強く）よさんか、二人とも」  
小林・清子「……」  
遠山「あそこに森はなかった。蜃気楼があるいは見間違いだろう」  
篠田「見間違いじゃありませんよ。蜃気楼でもない。確かに見たんです」  
遠山「森が急にできたってのか？」

田林「まあまあ、論じたところで始まりません。まずは確認をしようじゃありませんか」  
美香「もし、本当に森があったら？」  
田林「我々にとつて重要なことは、そこに食  
い物となるものがあるかどうかです」

三澤「（挙手をし）私が行きましよう」

篠田「俺も行きます」

小林「俺も行くぜ」

成瀬「行きたかないがしよがないな」

村人たちを見回し、

田林「森に入るかもしれないけれど、四人では少し不安です。どうです、ドクも一緒に行ってもらえませんか」

ドク「わかりました」

田林「男衆だけでは毒キノコの見分けも心許ない。玲子さん、誰か女性が一緒に行つていただけると助かるんですが」

玲子「あ、はい、毒キノコの見分けなら……」

真七「私が行きます」

風音、先行してイン――。

田林「よろしいかな、玲子さん」

玲子「はい」

田林「では飯島さんにも――（以下、先行してインした風音に掻き消され）」

○同

暴風が吹き荒れ土埃が舞う。

三澤を先頭に篠田、成瀬、真七、ドク、小林が風に抗うように一列縦隊で歩いている。三澤と篠田、真七がリュック

サックを背負い、男はバットやこん棒を持ち、全員がポロ布で口鼻を覆っている。

瓦礫の山の陰からネズミが現れる。

三澤 「ネズミ！」

真七を守るようにネズミに対峙するバットやこん棒を構えた三澤、篠田、成瀬、ドク、小林。

ミズミ、後ろ脚で立ち上がり威嚇する。大きく裂けた口からは異常に発達した2本の牙が覗き、前脚の爪も大きく鋭くなっている。  
ミズミ、大きく咆哮（鳴くのではなく明らかに咆哮です）する。

三澤 「（驚愕）な、なんだ」

驚く篠田、成瀬、ドク、小林の表情を。ミズミ、四脚に戻り瓦礫の陰に隠れる。

成瀬 「（驚愕）あゝあれはネズミか？」

こん棒を構えたまま驚愕の表情の顔を見合わせるドクと三澤。

腰が抜けたように座り込む真七。

ドク、真七を助け起こす。

ドク 「三澤さん！」

頷く三澤。

三澤 「前方の崩れかかったビルを指差し、あそこで少し休もう」

○ 同・崩れかかったビル・中

ガラスのない窓にベニヤ板を立て掛け、た何もない薄暗い室内で休む三澤、篠

田、成瀬、真七、ドク、小林。

壁に凭れ座る者あり、寝そべる者あり、  
ペットボトルの水を飲む者あり。

小林「何なんだ、あのネズミは？」

全員、沈黙。

篠田「何故こんなことになっちゃったんだ？」

長い間――。

成瀬「最初は訳のわからん病気だったよな。

コロナ、エボラ、マールブルグ……」

三澤「ラッサ熱、コレラに天然痘……。世界中で数億人の人間が死んだ。米軍の細菌兵器研究施設から漏れ出たなんて噂もあったが、俺は違うと思う」

小林「何故違うと思うんだよ？」

三澤「予定調和……」

小林「予定調和?! なんだそりゃ」

三澤「知らん方がいい」

小林「（怒り）おい、バカにしてんのか?! どういう意味だよ」

三澤「……」

小林「（怒鳴る）おい！」

ドク「予め神が決めた結果ということだ」

小林「神が?! こうなることをか？」

三澤「そうであって欲しくはないがな」

小林「念仏婆あじゃあるまいし、あんたも神とやらを信じてるのか？」

三澤「お前がその目で見えてきたことを思い出してみる。訳のわからんウイルスが人間を襲い、水と食料の奪い合いは大国同士の核戦争を勃発させた」

成瀬「……」

真七「……」

三澤「ある日、テレビが映らなくなり、水道

が止まり、電気が途絶えた……」

篠田「……」

ドク「……」

三澤「渋谷の交差点や新宿の歌舞伎町にどれ

ほどの人間がいたか憶えているな」

小林「それがどうしたってんだよ」

三澤「俺はな、村にいる人間以外の人間に、

もう何年も会ったことがない」

小林「……」

三澤「何十億人とした人間が、たかだか十数

年で哺乳類のレッドリストの筆頭だ。今や

パンダより少ない、少なくとも俺はそう思

ってる。これが何者かの意志的な結果じゃ

ないと誰が言える」

地鳴りがし建物が激しく揺れる。

固唾を呑む三澤、篠田、成瀬、真七、

小林、ドク。

○同・村・ビル前の広場

玲子「リュックサックを背負った玲子と恵美。

玲子「かなり大きかったわね」

恵美「悪いことの前兆ちゃうやろな」

玲子「悪いことって何よ？」

恵美「そやな、ネズミの大群が襲ってくる

か……」

玲子、引きつった表情で恵美の顔を覗

き込む。



恵美「な、なんて顔してんねん。(怒鳴る)お  
っちゃん、しっかり見張っといてや！」

○同・同・城壁

村を囲む城壁(壊れた家具や廃材)に  
設置された柵のような出入扉の脇に立  
ち、こん棒を持って周囲を警戒してい  
た神山、  
恵美の声に背後を一瞥する。

○同・同・ビル前の広場

リュックサックを背負った玲子、恵美、  
美香。

小走りに来る奈緒子。

奈緒子「遅くなつてごめんなさい」

美香「平気よ。男はまだ一匹も来てないんだ  
から」

奈緒子「景子さんは？」

恵美「調子が悪いんやと」

奈緒子「またあ?!」

美香「お腹が痛いらしいの」

恵美「ちやうちやう、(頭を指差し)ココと(股  
間を指差し)ココの発作や」

奈緒子「何それ？」

恵美「痛いのとちやうで、疼いとんのや」

奈緒子「はあ?!」

玲子「(窘め) 恵美さん」

恵美、首を竦める。

田林、遠山、影山、住吉、木田がやつ  
て来る。

田林を除き全員がバットやこん棒を手  
にしている。

田林「遅くなりました。本日のお供は遠山さん、影山さん、住吉さん、木田さんにお願  
いしました」

玲子「お願いします。今日は基地の跡地とそ  
の先の川に行きます。食べれるような虫や  
草が摘めればいいんですが」

遠山「わかっていると思うが、絶対に一人で  
は行動しないように。集団で行動していれ  
ばネズミもそうは襲ってこない」

奈緒子「あの、やっぱりトイレに行くときは  
男性と一緒にじゃないとダメですか？」

遠山「女はしゃがむから視界から消えてしま  
う。悪いがトイレは我々の見える範囲です  
ませてもらう」

奈緒子「（溜息）こればかりはいつまでたつて  
も慣れないわね」

恵美「（嬉しそうに）うちだけ安全や」  
美香「どうして？」

恵美「あのな、練習に練習を重ねてやっとな  
きるようになってん」

奈緒子「練習って何の練習？」  
恵美「（嬉しそうに）ふふん……」  
美香「何よ、教えなさいよ」  
恵美「（嬉しそうに）立ちション」  
美香、奈緒子、呆れる。  
玲子「（田林に）レイちゃんのこととは緑ちゃん  
に頼みましたので」  
田林「すみません」

遠山「よし、行こう」

城壁の出入扉を通り抜け、村の外へ出て行く遠山を先頭にした玲子、恵美、影山、美香、住吉、奈緒子、木田。

玲子「いってきます」

一行を見送る田林。

○同・同・別の城壁

神山の立つ城壁とは別の城壁。

廃材の上に立ち、こん棒を手に周囲を見張る宮川。

宮川、少し遠い位置（神山の立つ城壁）から村外に出て行く遠山、玲子、恵美、影山、美香、住吉、奈緒子、木田を見る。

○同・同・ビルのドクの部屋

ベッドで上半身を起こし窓外を眺めているレイ。

その脇の椅子に座る緑。

緑「何を見てるの？」

レイ「（無反応）……」

しばしの間。

緑「一番幸せなのかも……、あなたが」

レイ「（無反応）……」

○同・同・ビルの屋上

柵に凭れ、村から離れて行く遠山たち一行を眺めている小田嶋。

小田嶋、遠山たち一行とは別の方向を

見るように顔を傾ける。  
小田嶋「(独言)これだから見張りはやめられ  
ません」

○同・村の裏手の川

かつては街中を流れていた水量も水深  
もない小さな川。所々護岸のコンクリ  
ートが崩れている。  
川で上半身裸の薫が髪を濯いでいる。

小田嶋の声「困るなあ……」

裸身を硬直させ振り返る薫。

薫の背後の岸に立つ小田嶋。

小田嶋「一人でこんなところに来て、ネズミ  
に襲われたらどうするよ」

薫「……」

小田嶋「見張りは何をしてたんだってことに  
なるだろ。そりやマズイんだわ、俺として  
は」

薫、岸に脱ぎ捨ててあった服を掴み、  
小田嶋のいる岸とは反対の岸に駆け上  
がろうとする。

小田嶋、飛ぶように川を渡り薫の行く  
手を遮る。

服で胸を隠し小田嶋を睨み付ける薫。

小田嶋「おいおい、その眼はないだろ、ネズ  
ミが襲ってきたら助けてやろうってのに」  
顔を薫の顔に近づけ、

小田嶋「なあ、気持ちのいいことしねえか？」

薫「(睨んで)……」

小田嶋「お互い合意の上でなら田林のじいさ

んだって何も言えねえ」

胸を隠す服を持った薫の手に力が入る。

小田嶋「何なら一緒に暮してやったっていい

んだぜ。奈緒子のことなら心配いらねえ。

おまえがその気なら——」

薫、ペツと小田嶋の顔に唾を吐く。

小田嶋「田林のじいさんに可愛がられてるか

らって、いい気になってんじゃねえぞ」

後ずさりしていく薫。

薫に迫っていく小田嶋。

小田嶋「所詮、おまえと小田嶋のじいさんは

赤の他人。俺がおまえに何をしようが——」

薫、川に飛び降り、反対の岸に駆け上

がる。

追う小田嶋。

小田嶋、薫を捕まえ、岸に組み伏せる。

薫「放せよ」

○同・トンネル山

崩れたトンネルのある枯れたような

樹々が僅かに生えた小高い丘。

その丘の急斜面をよじ登る三澤、篠田、

成瀬、ドク、真七、小林。

ドクが真七の腕を引き、小林が真七の

尻を押している。

小林「ろくな物食ってねえわりにはでけえ尻

してんな」

真七、足の先で小林の顔を蹴る。

真七「あ、ごめくん」

小林「てめえ……」

ドク「何やってる！落ちたらケガじゃすまないぞ」

○同・同・頂上

頂上に立ち（給水塔の方向を）呆然と眺めている三澤。  
次々と登ってきた篠田、成瀬、ドク、真七、小林が三澤と同じ方向を眺める。その眼前に、遠方に立っかけての給水塔のすぐ背後にまで迫っている、まるでアマゾンの密林のような広大な森林が広がっている。樹々は給水塔の倍以上高く、その両端は地平線の彼方にまで続き、まるで太古の原生林のようである。

○給水塔

給水塔の間近まで迫っている森林の端。樹々を見上げる三澤、篠田、成瀬、ドク、真七、小林。

三澤「し、信じられん……」

成瀬「う、嘘だろ。なあ、篠田」

篠田「昨日は森の端が、このずっと奥だったんです。絶対、見間違いないです」

三澤「ネズミが巢食ってたら逃げ場はないな」  
ドク「銃は？」

三澤「いや、預かってきていない」

ドク「……」

三澤「……」

小林「入るのか入らないのか、早いとこ決め

てくれ」

三澤「……」

真七「こんな森、他には知らないわ。ここなら食べられる物も期待できるんじゃないかしら」

三澤「よ、よし、二手に分かれよう。余り奥へは入らず、互いの声が届く範囲で行動するんだ」

### ○ 森林

昼なお暗く、鳥や動物の鳴き声一つ聞こえない。

枝や蔦を避けながら来たドクが少し開けた場所に出る。

続き来る真七、篠田。

ドク「（大声）三澤さん、聞こえますか？」

三澤の声「（少し遠くから）ああ、聞こえる。

今のところ異常なしだ」

篠田「薄気味悪いくらい静かですね」

ドク「油断するな」

真七「待って」

ドク「どうした？」

真七、蔦の絡まる巨木の根本を探り、大きなキノコの株を掲げる。

真七「見て」

篠田「デカいな。食べるの？」

真七「しめじよ。野生のね」

真七、リュックサックを下し、しゃがんでキノコを探る。

真七「ここにもあるわ。ほら、そっちにも」

と、採ったキノコをリュックサックに  
放り入れていく。

ドク「(大声)キノコ発見！　しばらくここで  
採取します」

三澤の声「(少し遠くから)了解」

篠田「俺はこっちを見張ります」

ドク「よし、俺はこっちだ」

真七に背を向け周囲を警戒するドクと  
篠田。

真七「今晚は久しぶりのご馳走ね。キノコた  
っぷりネズミ汁」

篠田「(真七に背を向けたまま)くう、堪ら  
ねえ」

真七「玲子さんたちが虫を獲れば、虫の串  
焼きも付くわね」

篠田「ダンゴムシの串焼きも美味いよな」

真七、しゃがんだまま少し移動する。  
と、足元を這う夥しい蔦の数本が真七  
のつま先に絡まる。

篠田「ネズミ汁もいいけど、焼肉も随分食っ  
てないな」

真七「それは贅沢というものね。宮川さんの  
ネズミ捕獲機に期待するしかないわ」

真七のつま先に絡まった蔦が、まるで  
触手のように膝下まで絡まり伸びてい  
く。

真七「な、何!？」

その声に振り向くドクと篠田。

ドク「どうした!？」

立ちあがる真七。その膝下にはびっし



りと蔦が絡まっている。

篠田「な、何だよ、それ?!」

真七「何よ、何なの?!」

脚を取られ転倒する真七。

真七に駆け寄るドクと篠田。

ドク「引っ張れ!」

真七の両腕を引っ張る篠田。真七の脚に絡み付いた蔦をこん棒で断ち切ろうとするドク。

真七の下半身にスルスルと絡み付いていく無数の蔦。

真七「(叫び) イヤー!」

ドク「(叫ぶ) 三澤さん!」

三澤の声「(少し遠くから) どうした?!」

ドク「(叫ぶ) 早く、早く来てください!」

無数の蔦が真七の身体に絡まっていく。

泣き叫ぶ真七。

真七を引っ張る篠田。

真七の身体に絡まる蔦をはずすドク。

篠田、「ドク!」

ドク「どうした?!」

篠田「ドクの足!」

ドクの脚先に絡み付き始めている数本の蔦。

ドク「くそっ!」

と、その蔦をはずすドク。

篠田も「うわっ!」と、自分の脚先に

絡み付き始めた蔦に飛び退く。

三澤、成瀬、小林が枝や蔦を払い除け

ながら来る。

三澤 「どうした?！」

成瀬 「(真七を見て) な、何だ?！」

小林 「何故助けねえんだよ！」

と、真七に駆け寄り寄ろうとする。

「待て」と小林を押し留めるドク。

泣き叫ぶ真七。

真七の周囲を触手のように動いている

無数の鳶を。

小林 「な、何だ?！」

数本の鳶が真七の顔に近付き、真七の

鼻、耳に侵入していく。

真七の断末魔の絶叫。

その絶叫は次第に力を失っていき、ド

ク、篠田、三澤、成瀬、小林の夫々が

真七から顔を背ける。

鼻と耳から入った鳶から養分を吸い取

られたように、まるで老人のように縮

んでいく真七。

篠田 「(周囲を見回し) ドク……」

ドク、篠田を見、

それから篠田の視線の先を見る。

巨木の枝々から垂れ下がる無数の鳶が、

触手のような動きで徐々に迫ってくる。

ドク 「三澤さん……」

三澤 「(頷き) ああ」

篠田、成瀬、小林と目配せし、

三澤 「逃げろ！」

森の中を逃げる三澤、成瀬、小林、ド

ク、篠田。篠田は叫び、小林は罵声を

発しながら。

篠田、蹴躓いて転倒する。

と、鞭のように飛んでくる数十本の蔦。這って逃げる篠田の脚に数本の蔦が絡まる。

もがきながら泣き喚く篠田。

篠田の泣き声に立ち止まる三澤。

三澤めがけて数十本の蔦が飛んでくる。

その蔦をかわし、

再び走るように逃げる三澤。

篠田の身体に絡み付いていく無数の蔦。

泣き喚く篠田。

× × ×

森林の中に篠田の絶叫が響き渡る。

○瓦礫の荒野・村・ビル前の広場

焚火の近くで椅子に座り寝ている清子。

「ヒッ！」と一瞬引き攣り、再び静か

になる。

椅子から少しずり落ちた格好の清子。

白目を剥き、涎を垂らした清子の顔を。

○同・同・城壁

銃声が轟く！

その音に見張りに立っていた神山が振り返る。

○同・同・別の城壁

前シーンから銃声の轟きが続いている。

見張りに立っていた宮川が振り返る。

○同・ビル前の広場

ビルの窓から寝ぼけ顔を突き出す景子。  
焚火の近くには椅子に座ったまま眠っ  
ているような清子を。  
掘立て小屋から出て来て銃声のした方  
（ビルの裏手）に顔を向ける田林。

○同・ビルの中の部屋

二発目の銃声が轟く。  
ベッドで寝ていたレイが目を見開く。  
ベッド脇の椅子に座っていた縁、窓の  
外に視線を移す。

○同・村の裏手の川

岸に呆然と立ち尽くす薫。手には拳銃  
が握られている。  
駆けつけて来た神山が薫の少し手前で  
立ち止まる。  
遅れて駆けつけて来た宮川、息を呑み  
立ち止まる。  
薫の前に、俯せに倒れている血塗れの  
小田嶋。ズボンが膝まで下されている。  
田林、息を切らせ走り来る。  
小田嶋の死体を見る田林。  
田林、薫に歩み寄り、片手を差し出す。

田林「（優しく）よこしなさい」

薫「……」

田林「おまえの持つ物ではない。さあ、よこ  
しなさい」

薫、拳銃を田林に差し出す。

○同・村・ビル前の広場

焚火が焚かれている。

椅子に座り寝ていた清子が崩れるように椅子から地面にずり落ちる。

○同・村の裏手の川

薫の前に立つ田林。

少し離れて立ち尽くす神山と宮川。

神山「どうする？」

田林「拳銃の管理は私の管轄です。責任は全て私にある」

ガクツと膝を折り、膝立ち状態で田林の下半身に顔を埋める薫。

田林「墓を掘っていただけですか？」

神山「わかった」

神山、宮川を連れ、その場を離れるように歩き出す。

田林「一緒に暮らし始めてどのくらい経つ？」

すすり泣く薫。

薫の頭を撫ぜ、

田林「おまえが私に懐いてくれたときは、そりやあ孫ができたように嬉しくてな……。

今でも昨日のことのように憶えておる」

嗚咽して泣き始める薫。

銃声が轟く！

その音に振り返る神山と宮川。

田林の前で膝立ちしていた薫の上体が力なく崩れ落ちる。

田林の手に握られた拳銃を。

神山、田林に駆け寄る。

神山「あんだ……」

田林「小田嶋君とは別のところに埋めてやっていただけますか」

田林の手から拳銃が零れ落ちる。

体中の力が失せたように崩れ落ちる田林。

神山、崩れ落ちる田林を抱きかかえる。

神山「おい、すっかりしろ！」

神山「(宮川に)背中を貸せ」

田林を背負わされた宮川が小走りで村に戻って行く。

神山、落ちていた拳銃を拾い上げる。

神山「(拳銃を見て)……」

神山、小走りに宮川を追う。

### ○給水塔

(森林から逃げてきた)息の荒いドク、三澤、成瀬、小林が倒れ込んでいる。

上体を起こし、

小林「ちきしょう！　これじゃ念仏婆あの言うとおりにじゃねえか」

しばしの間。

小林「お、おい……」

三澤「(倒れたままで)クソ！」

小林「(語気強く)おい！」

ドク「(上体を起こし)どうした？」

森の際を指さし、

小林「見ろよ、あれを……」

三澤、成瀬も上体を起こす。

森林の端に続くコンクリートの地面を

突き破り、次々と樹々の新芽が芽吹いている。まるで植物の成長過程の映像を早送りしているように、新芽は瞬間に双葉となり、若樹から大木へと姿を変えていく。

驚愕するドク、三澤、成瀬。

ドク「（呆然と）夢を見ているのか……」

成瀬「何なんだ……」

三澤「……」

小林「（一瞬の叫び）グガッ！」

一瞬、小林の体に何か体が当たりし、次の瞬間、小林の体から飛び退く。

ドク「ネズミ！」

と、腰を浮かしこん棒を手にする。

慌てて立ち上がる三澤と成瀬。

後ろ脚で立ち牙を剥いて威嚇（咆哮）

するネズミ。立ち上がった背丈は人ほ

どもあり、牙や爪も異常に発達し、吠

える姿は小型の恐竜を思わせるように。

再び咆哮し、背を向け森に消えていく

ネズミ。

上体を起こしたまま顔を極端に傾けて

いる小林の後ろ姿を。首からは噴水の

ように鮮血が吹き出ている。

ドク「小林！」

と、小林に駆け寄る。

小林の首の半分ほどが引き裂かれ、気

管支から呼吸が漏れている。

何か喋ろうとする小林。

小林「（声にならない）——」

ドク、小林を抱き寄せ、寝かせる。  
首に巻いていた（口鼻を覆う用の）ポ  
ロ布を外し、  
小林の顔の上に被せるドク。  
ドク、近くにあった大きめの瓦礫片を  
持ち上げる。  
ドク、フーフーと早い深呼吸を2、3  
回繰り返す。  
見る見るうちに鬼のような形相に変わ  
っていくドクの表情。  
ドク、瓦礫片を持ち上げ、力を込めて  
小林の頭部に投げ落とす。  
画面、ブラツクアウト（暗転）――。

### ○瓦礫の荒野

倒壊したビルの瓦礫が広範囲に積み重  
なったなだらかな丘のような瓦礫の山  
の上で、身を寄せ合い怯えている玲子、  
恵美、美香、奈緒子。

その周囲で玲子たちを守るようにこん  
棒やバットを構える遠山、影山、住吉、  
木田。

その周囲を20、30匹のネズミ（四脚で立  
ち牙や爪は発達しているが恐竜を思わ  
せるほどではない）が取り囲み牙を剥  
き威嚇している。

美香「集団で行動していれば襲ってこないん  
じやなかったの」

遠山「こんなことは初めてだ」

影山「ああ、真昼間から、しかも集団でなん



て……」  
玲子「どうするの？」  
木田「このままじゃ時間の問題ですよ」  
住吉「に、逃げましょう。逃げるしかないですよ」  
遠山「問題はどうかやって逃げるかだ」  
住吉「どうかやって、走って逃げるしかないですよ」  
影山「あつという間に追いつかれるぞ」  
奈緒子「（泣く）イヤ」  
威嚇するネズミたちを。  
遠山「よ、よし、二手に分かれよう。二手に分かれ正反対の方向に走るんだ」  
影山「ネズミが一方を追ってくれば……」  
玲子「半分は助かるって寸法ね」  
奈緒子「（半べそ）両方ともにネズミが追ってきたらどうするのよ」  
影山「食い殺されなくなかったら、余計な事は考えずに走れ」  
恵美「それしかないやろな……」  
遠山「よし、そうと決まれば——」  
恵美「待ちいな。自分の一生を回顧する時間くらいは欲しいわ」  
美香「恵美さん、縁起でもないこと言わないで」  
恵美「あんまええ人生やなかったな。男にや散々騙されたし、とうとう結婚もできへんかった。ここ数年はロクな物も食べへんかったしな。しかも最後はネズミの餌や……」  
玲子「何言ってるの、最後まで諦めちゃだめ

よ！」

恵美「せや、最後まで諦めんといてや。でな  
いと、うち、浮かばれんよ」

恵美、瓦礫の小山を下り始める。

玲子「恵美さん、どこ行く気?！」

恵美「二手に分かれる作戦や。うちと、あんなら全員や」

玲子「ちよつと、恵美さん！」

美香「恵美さん！」

恵美「うちな、さっき逃げるときに足挫いた  
ってん。これ以上はよう走れんわ」

玲子「ダメよ、そんなのダメ！」

恵美「ええか、うちがネズミどもを曳きつけ  
ておくうちに逃げてや」

玲子「恵美さん！」

恵美「今や！」

と、片足を引きずり走り出す。

恵美を追うネズミたち。

遠山「走れ！」

逃げる恵美に群がるネズミ。

恵美の姿がみるみるうちにネズミの群  
れに埋没していく。

走る玲子、美香、奈緒子、影山、住吉、  
木田、遠山。

遠山「(立ち止まり)真直ぐに走れ！川まで  
行けばどうにかなる!!」

影山「(遠山に)何やってんだ、早く！」

遠山「逃げる！あとは任せた」

瞬く間に遠山の周囲に集まってくる数  
十匹のネズミ。

美香の声「ちっともカッコ良くないよ」

その声に振り返る遠山。

遠山の背後に立つ美香を。

遠山「お、おまえ、何で?!」

美香「本当にカッコ良くないんだから」

遠山、周囲のネズミを見回し、

それから美香を見て微笑む。

遠山「若い者より食欲はあるし……」

美香「……」

遠山「人生の締めくくりもネズミと格闘だ。

最後までカッコ良くないな」

美香、微笑む。

美香「そこがあなたの魅力なんだけどね」

遠山「わかってんじゃないか」

遠山と美香を囲むネズミたち。

遠山「見ろ、俺の魅力に釣られて、こんなに

集まってきやがった」

美香、笑う。

遠山も笑う。

ネズミが一斉に遠山と美香に襲い掛か

り、二人は一瞬にして飲み込まれてし

まう。

× × ×

走る玲子、奈緒子、影山、住吉、木田。

玲子「早く! もう少いで川に出るわ!」

地鳴りとともに大地が激しく揺れ始め

る。

激しすぎる揺れに瓦礫の上にへたり込

む玲子、奈緒子、影山、住吉、木田。

次の瞬間、玲子たちが倒れ込んだ一帯

の瓦礫が皿状に陥没し、大量の土埃が舞上がり視界を隠す。

地震、収まる。

風はなく、土埃で視界はなく、静寂が

周囲を支配する。

徐々に土埃が治まり、少しずつ視界が

晴れてくる。

立ち上がる影山、木田。

影山「皆、無事か？」

玲子「（立ち上がり）何とか」

奈緒子「ネズミは？」

木田、視界の悪い周囲を見渡す。

住吉、奈緒子も立ち上がる。

住吉「今の地震で逃げたかもしれませんよ」

奈緒子「そ、そうよ、きつとそうよ……」

土埃が更に収まっていき、視界が徐々に

に晴れてくる。

× × ×

土埃が治まり、徐々に視界が開けてい

く様を、ネズミ側からのシヨットで。

こちら側（正面）を愕然とした表情で

凝視している影山、玲子、奈緒子、住

吉、木田を。

× × ×

土埃が治まり、徐々に鮮明になってく

る影山、玲子、奈緒子、住吉、木田を

遠巻きに取り囲む数百匹のネズミの大

群。

驚愕の表情で立ち尽くす影山、玲子、

奈緒子、住吉、木田。

次第に近づいて来る（ネズミたちが一  
斉に襲って来る）地鳴り。  
眼をカッと見開いた玲子。  
その眼球に迫りくる夥しい数のネズミ  
が映っている。  
地鳴り、最高潮に達し――。

○同・村・ビル前の広場（夜）

焚火の周囲に佇む三澤、成瀬、宮川、  
景子、ドクとドクに寄り添うレイ。

ドク「15人……、今日一日で15人が死んだ……」  
しばしの間。

宮川「玲子さんたちは生きているかもしれな  
いじゃないですか」

ドク「生きていると思うか？」  
宮川「何かの理由で帰れなくて――」

ドク「本当にそう思うのか？」  
宮川「だけど、死んだと決まったわけじゃ――」

ドク「気休めを言うな！ 未だに帰ってこな  
いということとは生きていないということだ」

宮川「……」

怯えるようにドクに身を寄せるレイ。  
ドク「いったい何がどうしたってんだ。あの  
ネズミ、あの森は何なんだ」

沈鬱な表情の三澤、成瀬、宮川、景子。  
三澤「神がそう仕組んだんだ……」

と、ドクを見る。  
ドク「あり得ない……」

ビルの裏手より銃声が轟く。  
怯えたレイがドクに抱きつく。

三澤 「神山さんか？」

成瀬 「緑ちゃんさ」

ドク 「16人……」

再び、ビルの裏手より銃声が轟く。

成瀬 「おやじさんだ……」

沈鬱な表情で俯く三澤、成瀬、宮川、

景子。

沈鬱な表情のドクが怯えるレイを抱き寄せる。

○同（早朝）

土埃に煙る地平線から昇る太陽。

○同・村・ビル前の広場（朝）

消えかかった焚火。

風が吹き抜け、掘立小屋の戸がバタつく。

○同・同・ビルの裏手（朝）

非常階段の下で、ギシギシと風に揺れている大きな物の影。

——首を吊った景子であることがわかるように。

○同・同・ビル前の広場

小さな焚火の周囲に佇む三澤、成瀬、宮川、ドクとドクに寄り添うレイ。

成瀬 「俺はエボラにもラッサ熱にもサビアにも罹らなかった。がんにもだ……」

成瀬、立ち上がりポケットから数発の



立ち上がり、

三澤「苦しむのは短い方がいい」

と、地面から一発の銃弾を拾う。

三澤「ドク、世話になった」

ドク「……」

歩き出す三澤。

三澤「（独言）今度生まれてくるときは泥棒、否、ヤクザがいい。そう、チンピラヤクザで売春宿の経営者なんてのがいい……」

○三澤の視界

ビルの裏手に歩き来る。

寄り添うように倒れている神山と緑の

親子。

倒れている成瀬の死体。その手に握ら

れた拳銃を取る自分（三澤）の手。

三澤の声「女でもいい……」

拳銃に銃弾を装填する自分の手。

三澤の声「シャブ中の売春婦ってのも悪かな

い……」

拳銃を持った自分の手が視界から消え

る。

ゴクリッと唾を飲み込む音。

○瓦礫の荒野・村・ビルの裏手

成瀬の死体の脇で、こめかみに拳銃を

当てている三澤。

三澤、ゆっくりと目を閉じる。

○三澤の視界



闇――。

三澤の声「否、やめよう。生まれてくるのは、もうやめだ……」

至近で轟く銃声。まるで土管の中で撃ったように大音響が共鳴する。

○瓦礫の荒野・村・ビルの屋上（タ）

薄闇の中、柵に凭れ遠くシティのライトアップされた高層ビル群を眺めている。宮川「『螢の光』をハミングしている。

宮川「（独言）本日は当ホールをご利用いただき誠にありがとうございます。当ホールは間もなく閉店のお時間でございます……」

宮川、何かを感じ振り返る。

宮川の背後に立つドクを。

宮川「レイは？」

ドク「寝た」

宮川、再びシティのライトアップされたビル群を眺める。

宮川「三人だけになっちゃいましたね」

ドク「……」

宮川「あそこには何人の人間が生きていると思います？」

ドク、宮川の横に並びシティを眺める。

ドク「……」

宮川「どうするんです？」

ドク「お前は どうする？」

しばしの間。

宮川「俺ね、一人っ子なんです。両親に可愛がられて何一つ不自由なく育てられて……」

それが学生時代に女にフラれて、何もかも虚しくなっちゃってね……」

ドク、「……」  
宮川「変な宗教に入信したりして、拳句に学校を辞めてパチンコ屋に住み込みで働いて……」

ドク「……」  
宮川「楽しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、思い出していたんです……」

宮川「でもね、思い出すのはパチンコ屋で働いていたときのことだけなんです。もっと楽しいことも悲しいことも沢山あったはずなのに、思い出すのはパチンコ屋で働いていたときの、閉店放送が流れているときのことだけなんです」

宮川、涙を拭う。

宮川「優しかった親のこと、好きになった女のこと、思い出せないんです」

『蛍の光』をハミングする宮川。

宮川「申し訳ないけど、レイのお産、手伝えそうにありません」

ドク「（目を閉じ）……」

遠方のシティのビル群を眺めながら『蛍の光』をハミングする宮川。  
シティのライトアップされたビル群を。

○同・同・ビルのドクの部屋（夕）

薄闇の中、ベッドに寝ているレイ。  
ベット脇の椅子に座るドク。

(窓外から)銃声が轟く。  
苦渋の表情で掌で両耳を押さえるドク。  
目覚めたレイが怯えドクに抱きつく。

○同・ビル前の広場

風が吹き、土埃が舞う。  
焚火の前で椅子に寄り添って座るドク  
とレイ。

雷鳴轟き、激しく降る雨。

ビルの一階の窓の中に椅子に座るドク  
とレイが見て取れる。  
ドク、レイの膝に掛けてあった毛布を  
肩口に掛け直してやる。

僅かばかりの焚火。  
一人、焚火にあたるドク。

竈に火が炊かれ、湯気上げる大鍋。

○同・ビルのドクの部屋

ベッド脇に置かれた鍋から湯気が上が  
っている。  
ベッドで悶絶するレイ。言葉にならな  
い呻き声をあげている。  
鍋の湯にバケツの水を注ぎ、手で温度  
を確かめる腕まくりをしたドク。

○同・城壁

ネズミが徘徊している。

○同・同・ビルのドクの部屋

陣痛に悶絶するレイ。  
レイの股間に陣取るドク。

○同

強風が吹き荒れている。  
エコーが掛かったような陣痛に悶絶するレイの呻き声。以降、レイの呻き声と新生児の泣き声はエコーがかかったような、現実味のない夢のような感じ。  
次第に激しく悶絶していくレイの呻き声が絶頂に達し、  
突然、新生児の泣き声となる。

○同・同・ビルのドクの部屋

強風に激しい音をたてて閉まる入口のドア。  
ドク、逆さ吊りに持ち上げた臍の緒がついたままの新生児の尻を叩く。  
しかし、新生児は泣かない。

ドク「泣け」

新生児の尻を叩き、

ドク「頼む、泣いてくれ……」

尻を叩くドクの手から次第に力が抜けていき、

やがて叩くのを止める。

ドク「泣け、泣けよ……泣けて……」

ドク、新生児をレイの脇に寝かせる。

レイは白目を剥き、既に息絶えている  
ことが判別できるように。

茫然と佇むドク。

レイを起こすように強く揺すり、

ドク「なあ、何とか言えよ、なあ」

蹲り、嗚咽を漏らすドク。

ドク「声が、人間の声が聞きたいんだよ。な

あ、何とか言ってくれよ。頼むよ……」

ドク「激しくベッドを叩き、

ドク「声が聞きたいんだよ！」

ベッドに顔を埋め嗚咽を漏らし、

ドク「頼むよ……」

○同・同・ビル前の広場

消えかかった焚火。

竈に掛かった鍋から湯気が上がってい

る。

ビルから出てくる、まるで夢遊病者の

ようなドク。

○同・同・城壁

ネズミが徘徊している。

出入扉を抜け、夢遊病者のようにフラ

フラと歩き出てくるドク。

ドク「人間の声が聞きたいんだ……人間の

声が……声……声……」

○同

瓦礫の間を夢遊病者のように彷徨する

なドク。

少し離れた瓦礫の間を徘徊するネズミたち。だがドクを襲う気配は全くない。ドク「話す……話す……人間と話す……」

ドク、立ち止まり何かを見る。ドクの視線の先には彼方のシティの高層ビル群が。

○シティ・高層ビル群

外壁が崩れ傾いている高層ビルの角から夢遊病者のように歩き出てくるドク。

○監視カメラの映像

甲高いモーター音と連動して素早く視点を移動し、ズームし、眼下を歩くドクに照準を合わせる。画面に『Invader』の文字が点滅する。

○シティ・高層ビルに設置された銃座

カカカツ……と（弾薬切れで）空砲を撃ち続けている。

○同・高層ビル群

捲れ上がったアスファルトの間を夢遊病者のように歩くドク。

○同・別の高層ビルに設置された銃座

銃座が設置されている部分が半ば崩れ、台座が素早く回転するも、崩れた外壁に銃座の動きを阻まれたまま数十発の弾丸を発射する。

○同・高層ビル群

夢遊病者のように歩くドクの至近に数十発の弾丸が着弾する。悲鳴を上げ、頭を抱えて蹲るドク。

○同・また別の高層ビルに設置された銃座

空砲を撃ち続けている。

○同・高層ビル群

銃撃音が止み――

蹲っていたドクが恐る恐る顔を上げる。

ドク「(狂喜の表情で)美しい……、美しいよ。

人間の創造つくった音……。そうだよ、人間の音だ……」

立ち上がり両腕を広げ、

ドク「殺せ、殺してくれ……、もっと撃て、

もっと撃って俺を殺せ……」

フラフラと歩き出すドク。

ドク「撃て……撃て撃て撃て！ 殺せ！ 殺

してくれ！」

力なく跪くドク。

ドク「俺は……俺は人間と話がしたいんだ……。なあ、頼む、殺させてやる。だから、

だから話を、話をしてくれ……」

強風が吹き抜ける。

ドク、顔の向きを変え何かを見る。

ヨタヨタと立ち上がり、顔を向けた方

向に歩き出すドク。

○ドクの視界

霧がかかったような朧げな映像で、ドク以外の登場人物の声は全てエコーがかかったように。近代的で豪壮な日本国政府紋章のエンブレムの掲げである瀟洒な高層ビル（管理センタービル）にゆっくりと近付いていく。ビルの入口に到達すると、自動ドアが開く。エントランスに入っていく。

Reception（受付）に座るにこやかな笑みを浮かべた制服姿の受付嬢。

受付嬢「ようこそ『選ばれし民の都市』へ」

ドクの声「ああああ……」

受付嬢「お待ちしていました」

ドク「人間……の……声……」

受付嬢がカウンターに数枚のカードを提示する。

受付嬢「お好きなカードをどうぞ」

カードの一枚を取り上げる自分（ドク）の手。

受付嬢「（微笑み）上で皆様がお待ちです」

エレベーターホールに至る通路。

すれ違う何人かの男女。誰もが制服を着用し微笑んでいる。

男A「やあ、待ってたよ」

ドクの声「ま……待……って……いた……?！」

女A「いらっしやい」

ドクの声「あ、ああ……」



男B「遅かったじゃないか」

ドクの声「ああ……」

×

×

×

エレベーター内。

階数を示す数字が最上階の70で止り、

ドアが開く。

正面にガラス扉があり、その脇のカードリーダーにカードを翳す自分（ドク）の手。

ガラス扉が開く。

通路を歩き、

最奥のドア（管理センター）の自動扉が開く。

中では20人ほどの制服を着た男女が拍手で迎えてくれる。

部屋は広く、手前は警備室のようにモニターや管理機器が並び、奥には展望台のような大きな窓が広がっている

（窓外の景観は見せずに）。

ドクの声「あああ……」

男C「ようこそ、『選ばれし民の都市』へ」

ドクの声「ああ……」

女B「何もおっしゃらないで。全て理解しているわ。同じ人間だもの」

ドクの声「お：同じ人間?! ああ、お：同じ人間……。はは……。人間……。はは……」

自分（ドク）をにこやかな表情で歓迎している20人ほどの男女を。

ドクの声「はは、はは……」

奥の大きな窓を指さし、

男D「どうだい、ここからの景色を見てみな  
いか？ 素晴らしいぞ」

ドクの声「あ：ああ、で：でも、少し：疲れ  
た。ちよつとだけ：：、ちよつとだけ休ま  
せもらってから：：」

女C「それなら、ここでどうかしら？」

と、肘掛けの付いた大きな事務用椅子  
に案内する。

ドクの声「ああ：：、少しだけ：：」

○シテイ・管理センタービル・管理センター  
事務用椅子におぼつかない動作で座る  
ドク。

ドク「少しだけ：：」

ドク、瞼を閉じる。  
至福の表情を浮かべるドクを。

○同・同・表

崩れた外壁に掛かる、今にも落ちそう  
な薄汚れた日本国政府紋章のエンブレ  
ム。

○同・同・エントランス

Reception（受付）に座っているかの  
ような女性用の制服を纏った白骨化し  
た死体。  
カウンターに散乱する数枚のカードを。

○同・同・エレベーターホールに至る通路

白骨化した死体が散乱している。

○ 同・同・管理センター

至る所に白骨化した死体が散乱している。  
大きな事務用椅子に座るドク。  
白目を剥き涎を垂らし絶命している。  
エンドロール始まる――。  
画面、その奥の大きな窓に向う。  
そこに窓はなく、外壁が崩れ落ち、あたかも窓のような状態になっている。  
画面、外界の景観を写す。  
と、一瞬、太陽の光で視界を失う。  
やがて、徐々に鮮明になっていく外界の景観。  
そこには、一面を覆い尽くすかのような原生林が広がり、遠方には急峻な山々が屹立し噴煙を上げている。  
空には翼竜のような鳥が飛び、それは、さながら太古の地球の姿を映すかのよう。  
うに。

○ 太陽

岩場を洗う潮騒の音――。

○ 磯浜・自然博物館・表

エンドロール続いて。  
岩場に碎け散る波。  
海際まで迫る岩山にへばり付くように建てられた建物（自然博物館）。

○ 同・同・展示室

エンドロール続いて。

岩肌を保護するようにガラスが囲い、その中を覗くように、先生に導かれた大勢の生徒たちが群がっている。指示あるまで彼らの顔は見せずに。

先生「この壁画は約六百万年前のもので。私たちの祖先がこの地球上に現れる遙か昔に、文字を持った、つまり文化を持った知的動物が存在した証拠となるものです」

生徒たち、感嘆の声を上げる。  
画面、生徒たちの間を最前列（のガラスの前）に抜けていく。

生徒①、挙手をし、  
生徒①「何の絵が描いてあるんですか？」

先生「最新の研究では丸は月または太陽を、この帯状（川）のものは天の川を表している」とされています」

生徒②「文字は何て書いてあるんですか？」  
先生「未だ解読されてはいませんが、恐らく彼らの神を称える言葉ではないかという説が有力です」

画面、ガラスの中に展示されている（ドクが小高い岩山の窪みの壁面に描いた）地図を捉える。

We are here と書かれていた文字が We were here と過去形に変わっている。

生徒③「宇宙人じゃね」

生徒④「バーカ、あの絵をよく見ろ。せいぜい猿だ」

×

×

×

生徒たちを後からのショットで。  
エンドロール終わる。  
パンパンと手を叩き、  
先生「はい、では次の展示室に移動するぞ」  
小さな叫声を上げ一斉に振り返る生徒  
たち。  
画面、そこでストップするが、以後も  
生徒たちの雑談などは続く。  
スチル画像には先生をはじめ多くの生  
徒たちが写っている。  
誰もが人間のよ様な姿形はしているが  
その顔はバッタのよ様な昆虫顔で皆、  
短い触覚が生えている。

了